第５回　鎌倉市児童福祉審議会会議録

日時　　平成 20 年 7 月 18 日（金）　10 時～12 時

場所　　鎌倉市役所　２階　全員協議会室

出席委員　松原康雄委員長　池田雅之副委員長　石井孝子委員　冨田英雄委員
　　四方燿子委員　増沢隆夫委員

市出席者　　飯尾教育指導課長、池田教育指導課指導主事、松平教育センター所長代理、島崎生涯学習部次長（生涯学習課長兼務）、山田青少年課長、牧青少年課課長補佐、小村こども部長、安部こども部次長（こどもみらい課長兼務）、鷲塚こども相談課長

○松原委員長　それでは定刻前ですが、第５回になります鎌倉市の児童福祉審議会を始めます。本日の資料について、まず事務局から確認をお願いします。

○事務局　（資料確認）

○松原委員長　よろしいでしょうか。では、次第に沿って進めていきます。まず、前回議事録の確認ですが、事務局から説明をお願いします。

○事務局　事前にお送り致しまして、四方委員からご自身の発言の部分についてご意見をいただき、その部分は既に修正済みです。

○松原委員長　他に訂正等ありますか。気が付かれましたらまた会議の終わりにでもご指摘いただければと思います。では、議題に入る前に、今日、池田先生から報告書とてらこや通信をいただきましたので、先にコメントして頂いてから進めたいと思います。

○池田委員　おはようございます。「鎌倉てらこや」が今年６年目に入ったのですが、5年目の秋に大学で５年間のまとめのシンポジウム、それから展望をたてる会を持ちまして、その時の報告書が３月の下旬にできましたのでお持ちしました。

　その中身ですが、大学の学生を使って子どもの育成を、小学生・中学生を中心にやっています。その指導と言いますか手伝いに当たっている学生と、それから先生方などの教育関係者。それから外の目からどういう風に見えるか、マスコミの方とかやはり教育関係者とか、そういう方を交えましてシンポジウムを行いました。お目通しいただければと思います。

○松原委員長　ありがとうございました。この審議会でも「てらこや」のお話を随分伺い、参考にさせていただきましたので、今日も必要があればこの報告書に触れながら議論を進めたいと思います。

　それでは青少年の健全育成のあり方についてということで、事務局で今までの議論をある程度まとめ、報告書の原案を作っています。この委員会も大詰めに近づいておりますので、今日これに基づいて色々議論し、補足したり、あるいは新たな視点を加え、最終的な報告書にまとめていきたいと思います。それでは資料の１の説明をお願いします。

○事務局　（資料１内容説明）

○松原委員長　それではこれに基づいて議論していきたいと思います。先ほど申し上げましたように、今日で実質的な審議は最後になりますので、ある程度固めてしまい、最後の１回は確認する程度ということになると思います。

大きく柱を三つに分けてありますので、ひとつずつ確認をしていきたいと思います。細かい文言から、大きな項目立てについて、すべてのご意見をどんなところからでも結構ですのでいただきたいと思います。

まず「はじめに」のところですが、中学生から３０歳未満を思春期・青年期ということで取り上げて、議論をしてきたという、この共通理解でよろしいでしょうか。２０歳を超えた方のお話をしてきましたので、そこを確認した上で、１の（１）から（３）までの「現状と課題」について、ご意見をいただきたいと思います。

○冨田委員　３０歳までが青年期なのですか。最近の精神発達の状況からみると、もっと年齢が上がるような気がしますが。

○山田課長　国の青少年施策大綱では「青少年」の定義を３０歳未満のもの、と定義しています。

○松原委員長　青少年保護条例だと１８歳未満です。必ずしも３０歳未満が統一した見解かというとそうでもなくて、ただ、ここではそういう議論をしているということです。

○冨田委員　そうすると子ども会館を利用する年齢制限は３０歳ということですか。

○松原委員長　ここで書いているのはそういう年代の人も交流してほしいということです。そういう形ではむしろ子ども会館の活動の支え手として、３０歳未満の若い世代をもう少し動員できないかと、そういうことで議論してきたと思います。念のため子ども会館は条例ではいくつまでですか。

○事務局　中学生までです。

○松原委員長　高校生あるいは大学生、あるいは３０歳未満ぐらいの人に来てもらいたいと、これはあとの方で書いています。それから、青少年を支える活動、ネットワークづくりの３行目のところに「お兄さんお姉さん世代」とありますが、後ろの方では「年代が近い」という表現があるので、そちらのほうに統一しましょう。

○四方委員　この辺はきちっと決めることができないような話なので、「おおよそ」という言葉を「中学生」の前に入れておくのがいいと思います。

○松原委員長　それと、全体のつくりとして「現状と課題」に挙げた項目は、次の「育成に向けて」で全部受ける構成になっていると思いますが、ここに他の地域との連携が挙がっているのに、次ではそれをどうしようかという話が出てこないので、後で議論していく必要があります。

それから「育成に向けて」の内容ですが、総じて抽象度が高く、具体的にどう進めていけるのかという事をもう少し議論する必要があると思います。

○冨田委員　事務局に伺いたいのですけれども、（１）のイの「他の地域との連携」というので、他都市他自治体との青少年と支え合うとあります。姉妹都市の交流を毎年やっていますけれども、この中に青少年に呼びかけて青少年が交流しているという実例はありますか。

○山田課長　今回、敦煌市から中学生が姉妹都市交流で来ていますが、その他の萩市や上田市、足利市とどういう交流をしているかは掴んでいません。

○冨田委員　青年団の組織とか JC とかそういうところとかの交流はないですか。

○小村部長　JC とか交流の支援金というのがありますので、それで個々の団体が青年

とかを連れて行っている例はいくつかあります。スポーツでの交流ですとかそういうのも、毎年ではないかも知れませんが、やっています。

○松原委員長　そもそも姉妹都市はいくつあるのですか。

○事務局　姉妹都市は海外ではニースと中国の敦煌市、国内では萩市と上田市と足利市です。親子で足利に行って泊まって楽しもうというイベントはありましたが、青少年に特化して毎年継続しているものは特にありません。

○松平所長代理　継続的な交流はありません。どちらかと言うと、中高生が受け手になっています。自分達が企画して運営していくという基礎があまりないので、地域も見えてこない。本当に高校生を中心に考えていくのであれば、鎌倉市として高校生が自分達で企画運営もできるものを考えられるかという事になると思います。

○松原委員長　ありがとうございました。多分、今ボランティアをやりましょうと言っても、それは砂地に水を撒くようなもので、種蒔きと言うか、こちら側で参加してもらうような仕掛けを作って、そこに入ったら高校生達が自由にやれるようなものをこちらが準備する。種蒔きをしないとなかなか育ってきてくれません。多分、池田先生の「鎌倉てらこや」が既に種蒔きに成功して大きな木に育ったものなのかなと思います。

「育成に向けて」の項目でどういう風に具体的に主役として参加して貰えるかというのを議論していきたいと思います。

それでは、2 のところが大切ですので、ここを議論したいと思います。まず「社会全体での子育て」ですが、やっぱり地域の意識が凄く大切だという事です。ここに書かれている事自体は、理念として間違ってはいないと思うのですけど、じゃあ具体的にどうするの、という部分を入れていきたい。

例えば（イ）で言うと、他の都市で生活している担い手とも交流して連携をしていくという時に、どんな事を企画しようか、こんな事というアイデアがあれば、出していただきたいと思います。今、P 連とか子ども会連合会の組織率が落ちていますから、ああいう形は親達にもちょっと馴染まなくなっていると思いますので、もう少し主体的に参加できるようなアイデアがあれば話していただきたいと思います。

○松平所長代理　今は、小学校で父親の会とかを持っているところはありますか。

○冨田委員　ソフトボールの会などはあります。小学校の PTA の役員とか卒業生の保護者の会です。中学校もやっています。小中の交流でのソフトボール大会もやっています。ただ、それが他の球技にまで発展しているかどうかはよく知りません。

○松平所長代理　横浜の別所小学校に「別所パパの会」というのがあって、今 5 年目ぐらいですが、体験学習とか土曜登校日とかそういう時にカレー作りとかを異職種のお父さん同士が集まって、学校の先生や子ども達もお母さん達も来てやっています。今、ソフトボールとあったけどもここでも学校の職員とソフトボール大会もしています。

そういう中で少しずつ、地域の側からイベントをやるから親父の会として店を出してくれませんかというような事で少しずつ繋がりができていったというケースがあります。

そういうような事は、親の自覚で生まれるものですから、作ってくださいとか作れとかいうものではないのです。一番難しいのは、地域に住んでいる人とか学校にいる親自身がどうやったら自覚を持つか、という事です。そこ抜きには全てが語れないわけで、

その自覚作りに行政がどう種蒔きするのかについて、凄く頭を悩ませています。

○松原委員長　例えば別所小学校の経緯とか、何かあるはずです。鎌倉はそういう活動をしている親の会というのはありますか。

○飯尾課長　私達が把握しているものとして PTA 活動があり、その中でほとんどの学校で親父の会的なものはあると思っています。よく活動しているのは市 P 連のソフトボール大会あるいはバレーボール等球技を通して、教員・教職員と保護者が一緒にチームを作り対抗戦の中で親睦を深める。あるいは大船地区ですと学校間でそれに向けて何回か定期戦等を行っている小学校・中学校がありますが、基本的には学校の中で、PTA 活動的な中でやっているものが多いと思っています。

○松原委員長　何かこの辺でアイデアをお持ちでないでしょうか。

○冨田委員　ロータリークラブの下部組織にローターアクトクラブ、インターアクトクラブというのがありまして。インターアクトクラブというのは、高等学校のクラブ活動の一環としてジュニアレッドクロスと同じような形での奉仕活動をやっています。ローターアクトクラブというのはいわゆる青年団で、大学とか地域の若い人達の集まりですが、鎌倉にもどちらもあったのですけど今は消えてしまっています。

これは全県下で若い人が集まっていまして、副委員長が主催している「てらこや」に似たような形の活動もやっていますので、この辺をなんとか取り込むことができるといい。社会資源の大なるものなので、もったいない。

○松原委員長　てらこやの良さは見えていますけども、地元の親世代ですとか、地元の子どもはいかがですか。

○池田委員　今「てらこや」では子どもと学生の関係はうまくいっていて、一番の課題は「大人」「親」なんです。それをどういう風に理解していただくか、取り込んでいくか、という事に力を注いでいます。

「てらこや」に子どもが来て、学生とかかわることによって子どもがどんどん変わっていく、心が開かれていきます。そうすると、親が「いったい何が起こっているのか」と感じるのです。家だとあまり喋らない、引きこもりがちな子が、徐々に変わっていく。それを見て親が出てくるというのでしょうか。そういう現象が今起こっています。

そこで、親の会を「てらこや」でも作ろうことで、親ボランティアとして色々お手伝いをしていただいています。てらこや合宿が、8 月 7 日～9 日に建長寺であるのですが、その時に食事のお手伝いをしていただくとか、子どもがものづくりをするところで見守っていただいてお手伝いしていただく。少しずつこちらが仕事を割り振って、どんどん入っていただき、いずれは、大人スタッフとして関わってもらうという事です。大人を巻き込もう、ということですね。

それができるのは、子どもが変わっていくというのを見て、大人も変わらざるを得ない、というか、自分も何かしていきたいと思うことです。

もう一つやっているのは、子どもたちをスタッフ化していまして、我々「子スタ」と呼んでいるのですけども、子どもスタッフ。この前、6 月に光明寺合宿をやったのですが、そのとき 5 人入れました。小学校の高学年から中学生ですね。今度は建長寺合宿がありますから、ちょっと広げて 8 人ほど入れて、学生と一緒になって、学生と同じ役割

ですね、そういう「子どもスタッフ」を作っています。

6年目に入りましたので、小学校の高学年で関わっていた子は中学の高学年あるいは高校生になっています。そういう子たちを「戻す」、「てらこや」にもう一度戻してやるということです。中学 2 年になると「てらこや」は卒業なものですから、「てらこや」で 2 年、3 年間育った子たちを戻して、その子たちを「子どもスタッフ」から「学生スタッフ」に切り替えていこうと考えています。

それと、今は早稲田大学の学生がやっているのですが、もっと地元化していきたいと考えています。地元の大学生、「てらこや」で過ごした子どもたちをスタッフ化していきたい、6 年目に入ってそういう風に、徐々に切り替えていこうかなと思っています。

○松原委員長　凄く大切なことです。この委員会として、「○○○」という活動をやってこういう事をしようというのはなかなか難しいと思うのですが、子育て関係は色々な支援の一覧表とかを作っています。子育てメディアスポットに行くと手に入ります。

この、一覧表のもう少し上の子どもたちを対象としたものを作って、どういう団体やグループがあり、そこに親がどう関わっているかといった情報が提供されれば、自分からもう少しかかわろうかな、と親も主体的に参加してくると思います。

地域でもう少し親に参加してもらうためには、まず、既にあるものに入ってもらい、そこから新たな活動をしていってもらう、というのが現実的だと思います。

そういうものを行政として作れる可能性はありますか。子育て支援の情報の、もう少し年齢が上の方バージョンを地区センターに置いておくというようなことです。

○島崎次長　生涯学習センターで、「かまくら子どもナビ」というのを年に 2 回発行していまして、今回、夏休み前に 1 回目を発行しました。お子さん向けの講座とか、遊びながらみんなで集いましょう、というような催し物を 1 枚の紙にまとめて、それをお子さんたちにお配りしています。具体的な中身としては、鎌倉、玉縄の青少年会館、学習センター等で子ども向けの催し物をする、というようなお知らせです。

○松原委員長　「お子さん、お客さんでいらっしゃい」というパターンではなく、もう少し「一緒に活動やりませんか。」という姿勢に変えるといいのでしょう。そういうところで実際に色々な方がボランティアとして参加しているわけですから。行政直営というわけではないですが、少し作り変えるだけでも随分違うだろうと思います。

○冨田委員　「生涯学習」という、あとで出てきますけれど、ネーミングがよくないと思います。私はスポーツ振興会などで、赤ちゃんから痴ほう高齢者まで全部が幸せに、健康でいられるように、というのが「生涯学習」です、と説いていますが、どうも受け手側からすると、高齢者対象の仕事をしているように感ずることが多いようです。

今、話を聞いていると随分と子ども向けのこともやっているのに、なかなか表に出てこない、というのがもったいないと感じます。何かうまい方法はないでしょうか。

○池田委員　「ボランティア」という言葉や「生涯学習」という言葉は、ちょっと不十分というか、硬いですね。もう少し柔らかい、入りやすい言葉はないでしょうか。「ボランティア」というのも、もともとあれはヨーロッパ産の言葉で「志願兵」なんていう意味があったりします。やっぱり個人主義文化から生まれた言葉ですから、日本にちょっとなじまないですね。

○松原委員長　やっている内容と、言葉が持っているイメージとが違うというのは確かにあります。

○四方委員　親が参加している状況を見ると、やはりスポーツ関係のリトルリーグみたいなもの、あれは相当なエネルギーを親は入れています。親のその力がなくてはもう成り立ちません、という発想が最初からあって、お父さんもお母さんもみんなが試合あれば一緒に行き、練習があれば一緒に行きとやっている。そういうのを見ていると、必ずしも親にエネルギーがないのではなく、相当あると思います。

ところが、何かやる時に、最初に「親も一緒にやってもらいますよ」というと反発が非常に生じるというのが現状ではないかと思います。

ですけれども、根気よく、池田先生がさっき仰っていたように、呼びかけを諦めないということが一番、と思います。むしろお父さん族です。何人ものお父さんが会社での疲労感をそこで癒し、あるいは鬱に陥るちょっと前のところあたりで地域に参加する事で目覚めていく、という事があったと思います。すぐに仕組みとか、形をどうしてくとか、という事よりも、呼びかけが基本的には必要だ、ということを提言としては書いておく必要があると思います。

○松原委員長　そうですね。例えば「子育てナビ」は非常にいいと思うのですが、実際に協力してくださっている人たちにインタビューして、こういう人たちに手伝ってほしいというような情報も入れられるといい。まさに「呼びかけ」です。それは仲間からの呼びかけみたいのも一緒に、あるいは先輩活動家の呼びかけも一緒に入れておく、というような形にするとずいぶん違うと思います。

○冨田委員　最近、幼稚園でも小学校でも父親の参加が大変に増えています。入園式や卒園式に夫婦で来るとか、年寄りも一緒に来るとかで、１人の子どもに保護者が４人も６人もいる状態があって、お父さん達の集まりがあちこちにできています。

そして、そのままずっと小学校にまであがっていって、幼稚園、保育園で父親のクラブとかお父さん会がきちっとできれば、小学校のＰＴＡ活動も保護者の中の父親の力がぐっと伸びてくる。

それがずっとつながっていくと社会まで伸びていきます。そうすると、若い人たちの中で土曜日、日曜日に家でテレビ見ているのだったら地域で活動してみたいと、気持ちあるのだけどその基礎作りがない。それが今幼稚園、保育園に出て来ていますから、幼稚園、保育園にそういう保護者会活動に力を注ぐような誘導をしてもらえば、それはかなり将来の力としてはあるのではないかと思います。

○松原委員長　そのようなご意見は例えば（１）のア　ところに、いきなり始めるのではなくて、乳幼児期からの親たちのグループというのを継続的につなげていく必要があるということだと思います。

それから、今言ったような参加の呼びかけは、ア　か　イ　にネットワークづくりというのが入っていますので、ここに入るかと思います。

あと、社会参加の手前のところで気になったのが　カ　で、これはまさにこの辺で青少年が受身だ、と受け取られるところだろうと思います。カ　は、こういうものをやられてしまうと今の話と逆になってしまいます。何らかの指導的立場をお願いすることに

よって、でもこれも当該世代の協力がないとできませんが、何らかの制度というのは事務局ではイメージがあったのですか。

○事務局　青少年指導員から、そういうかたちで活動している方々と連携を組むような形で、もう少し数多くの市民の方にかかわっていただくというイメージはありましたが、それ以上の具体的なものはありません。

○松原委員長　後ろの方で「青少年指導員」という名前がよくない、と書いてあります。やっている中身も変わらないですよね、名前だけ変えても。意図はよくわかりましたが、なかなか青年たち側が呼びかけて地域住民の人と交流を持つ、というような事は具体的にはないでしょう。先輩世代出てこい、というような中高生の動きはありませんね。

○四方委員　今、地域の青年会というものはないのですか。

○増沢委員　商店街に青年部というものがあります。それが例えば夜店、商店街の青年部が中心になって夜店をやって、それで色んなお店を出して、そこで行事を盛り上げるという形はやっていますけども。町内会では聞いたことがないです。

○四方委員　青年部というのは大概、４０歳位の人が多いです。

○冨田委員　この前、深沢夏祭りというのをやっていますけど、これはいわゆる商店会の若手の人たち、若手の青年会、若手社長の会とかそういう人たちが集まって、お祭りの企画から夜店から全部やっています。町内会の役員がまとめ役はするけど、実働部隊は若手です。この人たちを活用する方法があるといいですね。

○松原委員長　カ は「青少年を指導する」ではなくて、「青少年と交流する」ということでしょう。その裏づけを作ることですので。今、中学校では授業として地域の大人の話を聞くというような交流はないでしょうか。

○飯尾課長　小学校だと地域の話を聞くという事がありますが、中学校ですと職業的な部分で、誰かのお父さん、お母さん、先輩とかに、職業的な、あるいは生き方的な部分で講師として来ていただくような機会を設けた学校はありますが、目的としてはあくまでも職業的なものだと思います。

○松原委員長　高校は市の所轄から外れてしまいますが、大人との交流があってもいいのではないでしょうか。参加していただくという事で交流するという事を書きましたが、とにかくそういう機会を、少なくとも中学校で設けて欲しいというところまで書き込むということでいかがでしょう。色々なパターンがあっていいと思います。どこかのイベントとか。それは例えば、地域環境のエコの問題で話し合ってもいい。

○池田委員　今、「てらこや」にとってヒントをいただいたような気がします。まず子どもと学生のコミュニケーションを図って、ある程度年齢が近いですから。「てらこや」の趣旨は親と子どものギャップがあり過ぎるものですから、言い方は悪いですけども緩衝地帯として学生が入る事によって学生と子どもが繋がり、そして家庭関係もそれによってリセットされる。つまり、親世代と子どもが何かまた新しい関係、もっと柔らかなものができるのではないか、それをある程度やりながら実感としてうまくいっているように思っています。

今ご提案があった「大人と子どもがもう一度繋ぎ直す場」、「繋がる場・議論できる場」というのが必要だろうと思いました。昨日「てらこや」の会議があり、今度の建長寺合

宿は、学生が「巻き込みュニケーション」と呼んでいる、三世代を巻き込んで、そこでこう繋いで、絆を作っていくということを考えています。

先日、「てらこや」の提唱者の森下一先生の講演会があり、大阪の泉佐野という所が「てらこや」を作りたいという事で 6 月の下旬に行ったのですが、その直前、6 月 8 日に秋葉原で 25 歳の青年が 17 人の人を殺傷するという衝撃的な事件がありました。この事件に関し、精神科医である森下一先生は、ちょっと極端ですけれど、あれは本当は母親を殺したい代理殺人で、子どもが育つには「ベイシックトラスト」、「原信頼」あるいは「基本的信頼」というものがないと、人間というのは非常に難しいと話されています。

それがまず母親と子どもの絆、しかし母親ないし父親と子どもの絆が壊れたとしても色々な関係、友人とか、愛する先輩とかとの「ベイシックトラスト」がどこかにあれば歯止めが利いた、という事です。あの事件では暴走してしまったけれど、本来、昔型の殺人であればあれは親殺し、母親の代理だったのではないかと。その解釈は色々あると思いますが、私がそこで気付いたのは「巻き込みュニケーション」から、やはり「ベイシックトラスト」という基本的信頼を色々な世代が気付くところまでいかないと、次の「てらこや」の展開が難しくなってくるのではないかということです。

大人と子どもの議論の場を作るという中で、やはり「ベイシックトラスト」を築かなければなりません。親子には元々ある。あるのだけども、今、やはり壊れていますので、「てらこや」だとか色々な場を作りながら「ベイシックトラスト」というのをもう一度築き直す、そういう次の課題へ向かって行きたいと考えています。

○松原委員長　４ページから５ページは社会参加・居場所作りの事も書いてあります。社会参加も主体的にまさに参加してもらうということですが、そういう情報について鎌倉市社協は発信していますか。ボランティア情報というのはあそこが窓口になっていて、ボランティアコーディネーターがいると思います。

○松平所長代理　ボランティア登録は受け付けていますが、例えばこういうイベントがあるからこういうボランティアさん来て下さいとか、高校生さんをどうぞ、とかいうような呼び掛けはしていません。

○松原委員長　ボランティアセンター的なものは社協が持っていると思ったのですが。

○事務局　社協のホームページを見ますと、ボランティアの欄があって、そこに子育てとか高齢者とか、かなりの項目があると思います。青少年という項目もそれなりのものは組織はされていると思います。

○松原委員長　調べておいていただくことにしましょう。

○事務局　今、社協の本部をイメージしてお話ししましたが、地区社協はまた別に色々な活動していますので、そこも調べておきます。

○四方委員　日本全体の文化としてボランティア活動の資質を高める、とありますが、要は青少年のボランティア参加というのが本命ではあるのでしょうけど、当面は、社会全体として大人がボランティアに参加している状況をここで書いた上で、青少年も、というようにしておかないといけない。まずは大人が開眼しなければなりません。もしかしたら青少年が開眼して大人がそれについて行くのかも分かりませんが。オ　の所にはそういう事を書いておく必要があります。

○松原委員長　そうですね。ワークライフバランスの問題とも組み合わせまして。あと、社会参加が全面的にボランティアという事になっていますが、それはいかがでしょうか。
○冨田委員　ボランティアだけではないです。
○松原委員長　具体的に資料２を見て今までの議論の中で、他に社会参加で出てきたことはありましたでしょうか。確かに中高生は地域を素通りしてしまう、町にいません。
○松平所長代理　二宮町には、「まちづくり工房しお風」というところがあって、その人たちが５年前から高校生を取り込んで、一緒に町の人にお話を聞いたり、マップを作ったり、それを全国に配布したりして、そういうまちづくりをしています。
　要するにまちづくりから世代間交流が生まれるということを実践しています。
○松原委員長　すごく大切な視点だと思います。地域づくりみたいなところに、それこそ今、鎌倉が社協を中心にしてやっている部分は、まちづくりとしてはどうでしょうか。
　ボランティアだけではなく、まさに「社会参加」が「まちづくり参加」になる。まず、そういう青少年が活躍、活動できる、そういうまちづくりの必要性を先にあげておくと、四方委員がおっしゃっていたようなことに、繋がっていきます。
　その中で（３）が「拠点になる場所づくり」ですが、ここで（３）の イ がすごく大切だと思います。例えば運営を青少年に任せる、というより、もう少し具体的に「運営委員会をつくる」という表現をしてもいい。
　（３）の ア もすごく大切で、こういう拠点を当事者の運営に任せながら、青少年会館だけではなくて、いくつ増やしていけるかということです。ここは、既存の施設も話が出ていますが、「鎌倉てらこや」のように、週に何回というような形でも、この中に含めていいのだろうと思います。常設的なものと、そうではなく定期的に開催される居場所、定期的にオープンされる居場所、というのもあってもいいと思います。
○冨田委員　居場所づくりに大きな力を発揮するのは、主任児童委員だと思います。この中には主任児童委員という言葉が出てこないのですが、主任児童委員の多くは、民生委員が高齢者のケースを多く抱えているので、そちらに時間を取られてしまい、主任児童委員本来の仕事を本人自身もイメージできない、というような話もあります。
　もっと居場所づくりや、引きこもりの訪問や、親のネグレクトの早期発見といった仕事をしてもらうと、それが若い人の社会参加にも繋がると思います。せっかくいい人が主任児童委員として手を挙げてくれていても、その人達の地域での認識力が少ないというか、評価が非常に気の毒ですので、どこか書き込んでおきたいと思います。
○松原委員長　居場所づくりで主任児童委員がやるのは、乳幼児期から小学校ぐらいまでで、なかなか中学生にまで延びている事例がありません。金沢区かどこかで、不登校の子どもと一緒に昼ご飯を作る会の児童委員さんが活動している事例があったと思います。書き込むとすれば居場所づくりのところでしょうか。
○四方委員　カ でも主任児童委員さんに少し触れた方がいいと思います。
○松原委員長　交流のところですね。そこでも主任児童委員さんの話をしていました。
○四方委員　一番気になるのは、主任児童委員さんの数が少ないのではないかという事です。世帯というか子ども当たりの数にしてみるとどのくらいでしょうか。
○松原委員長　鎌倉市は民協はいくつ持っているのですか。

〇事務局　10 区です。
〇松原委員長　地区民協が 10 で、そこに 2 人ずつですから 20 人ですね。
〇四方委員　その人数では、こういう事までは手が回らないだろうという気がします。
〇松原委員長　大阪市か大阪府で一小学校区に一主任児童委員を実現している例があります。
〇冨田委員　元々、一中学校区に 1 人というのが基本ですね。
〇松原委員長　先進的な所は一小学校区に 1 人を実現しています。
〇冨田委員　そうでないと、事実上活動できませんから。
〇四方委員　中学校区というのはかなり大きいので実際には活動しにくい。
〇松原委員長　本当はそうやって幼稚園、保育園世代から子どもに対する色々な活動をしてきた人が、主任児童委員さんになれればいいのでしょう。さっきの交流の部分とか居場所作りの所で主任児童委員さんの役割を考えましょう。増員までは書きにくいですが。
〇四方委員　増員とは書きにくいのだけど、この力をどこまで発揮してもらえるようにするかということです。
〇松原委員長　充実していきたいところですね。
〇四方委員　それともう一つ、これは根本的な事ですが、居場所作りという言葉は非常に分かりづらいですね。何をもって居場所、あるいは居場所作りとするか非常に難しいと思います。実際こういうことが必要な子どもには、家の中での居場所がないのではないか、人の中での居場所作りというような書き方がいいかなと思います。
〇松原委員長　単に物理的なものではなくて、コミュニケーションがある、あるいは世代間交流があるという意味ですね。それをうまく表現できるようにしましょう。
〇四方委員　何かいい表現はありますか。引きこもりでもいいし、虐待のお子さんでもいいけれど。人と交われる居場所。人の中での居場所です。
〇松原委員長　交わりの場作りという感じでしょうか。
〇四方委員　難しいですね。子ども達が自分の中で本当に湧き上がるように、求めているものが例えあったとしても場所がないから、機会がないからという事で、あるいは大人がサポートしないから、という事でそのままになっている人たちへの問題です。あくまでもそれは人と交わる事、あるいは人に安心を求める事で、「ベイシックトラスト」にも通じるのでしょうか。
〇冨田委員　居場所作りと言うのはマスコミの造語ですか。コンビニの前に夜遅く、たむろしている若者は居場所がないって。
〇四方委員　一番大きな事は、一緒にご飯を食べる本当の相手がいない、家の中で。それでたむろしている、という事です。
〇松原委員長　大きな（３）の キ なんかは、子ども同士が交流するという場面で、これもすごく大切だと思います。
　次に６ページから７ページの特別な支援です。ここも随分と議論をしました。
〇四方委員　就労支援のことが、これが市だけでは難しいという事になりました。高校中退とか中卒の方の学習支援をと書いてありますが、就労の部分と言うのが、あるいは

例えば職業訓練とかも、どこかで、市だけではできないとしても、そういう事に目を向けてほしいと思います。

もう一つが性非行を含む色々な非行の問題です。市独特の条例を作れば全てが解決するような事は決してない、決してないのだけれども、あまり大らかなままで良いかという事です。この辺がどう表現していったらいいか難しいところです。

本当に厳しいデータですが、ある自立支援施設の統計では、男子の１／４が性加害の成育歴がある。性被害を受けた人もいますが。これが自立支援施設だからと言う事だけでは済まされません。性非行も一般的には水面下でなかなか現れないのだけれど、そういった状況があるという認識は持ってなければいけない。

それで、観光地なので難しい面もあるかも知れませんが、市独自の夜間あるいは青少年・青年の外出を含めて、何らかの条例があったほうがいいと思います。

京都ではコンビニに２４時間営業の自粛を求める動きがあるようです。エコの問題で出発していますけども、大変重要だと思います。大人の生活が昼夜逆転しているようなところがあって、今の青少年はあまり良くない文化の中で育っています。だから、そのあたりも含めて何らかの条例があることが、性非行あるいは非行の問題には大事かなと思っています。

○松原委員長　今、県の条例では１１時までですか。

○飯尾課長　県の青少年保護育成条例で、午後１１時から午前４時までです。

○松原委員長　それを前提に､そういう青少年関係の条例を作っている市はありますか。

○事務局　確認はしていませんが、聞いたことはありません。

○四方委員　実際に県条例というものは、市民はみんな知っていますか。

○飯尾課長　学校で、明日から夏休みということで、夏季休業中の子どもとの約束事というのを、市内で統一してやっています。その中で、小学生については６時以降の外出は控え、午前中は自宅で学習ということで友達を誘わない、というような内容です。それとあわせて、保護者向けプリントに県の条例では午後１１時から午前４時までは外出禁止の時間になっていますと入れてありまして、こういう機会にお知らせしています。

○四方委員　現実には、例えば海岸とかにいるのは、やっぱり１１時ですか。

○事務局　県の迷惑防止条例の中に、去年ぐらいから花火の項目が入りました。

○松原委員長　ちょっと話が違いますが、メンタルフレンドは県の制度として書き込んでありますが、何か市との連携でこういうことができるというものはありませんか。

○増沢委員　社会参加のところに、市内の人にメンタルフレンドの開拓とありますが、例えば、市として市内の方を紹介していただくというような連携は可能だと思います。しかし、どうやって発掘していくかがなかなか難しいと思います。

それともう一つ、特別な支援のところで、虐待については書いてあるのですが、その他についても、やはり本人に対する支援も必要でしょうが、家族に対する支援という視点もあるべきではないかと思います。

○松平所長代理　メンタルフレンドに関しては、フレンドリースタッフとは別に、市独自で登録制度で実施しています。

○松原委員長　それは県のネットワークのものとは違いますか。

○松平所長代理　違います。市独自のメンタルフレンドとして、今のところ早稲田と文教と鎌倉女子大の方が登録されています。ただ残念ながら皆さん女性で、登録していただいても、相手との相性の問題もありますので、実際の活動の場がないこともあります。

○松原委員長　事務局がここに書いているメンタルフレンドは、市の制度ですか。

○事務局　県をイメージしています。

○松原委員長　どこかで市以外のところも書かないといけないでしょう。先ほど出ていた他の地域との連携も、具体的な形として定期的な交流をしましょうという事をどこかに入れておく必要があります。

今後の課題のところに、青少年に関する計画がありますが、ここの提言として次世代の育成計画の後期では、これに関しても勘案してほしい、というのを一言入れた方がいいでしょう。

全般をひと通り追ってきました。お気付きの点があればご指摘いただきたいと思います。逆に事務局は、今日の議論の中で、ここはどう解釈しましょうか、という確認をしておく点はありますか。

○事務局　いくつか具体的なご指摘もいただきましたので、それも踏まえて全体的に見直したいと思います。２の（4）の次に（5）として「地域との連携を編成しましょう」というような形で組み込み、全体的にもう少しボリュームを増やすような方向でまとめます。

○石井委員　全体を見た場合に、文脈として、青少年の問題があり、そこには色々な背景があって、その問題解決に我々は、家庭と地域の教育力という部分に期待して、こういうようにすればいいのではないだろうか、と言う流れで議論してきたと思います。

「はじめに」の４行目から５行目に、「背景には、家庭や地域における教育力が低下している問題があると考えられます」とありますが、これだけが背景になっているような、読み手が違和感を持たないように、例えば「教育力の低下やその他様々な問題が複雑に絡み合っている」というような表現ではどうでしょうか。

必ずしも家庭と地域の問題か、というとそうではないと思います。家庭と地域で変える、青少年の問題を変える第一歩にしようという提言になるとするならば、出だしの部分を少し変えた方がいいと感じます。

その次に「親子関係が深刻な問題を孕み、地域社会の人間関係が考えられないほど希薄になっている中で」とありますが、ここまで書かれてしまうともう後がない、みたいな感じがしてしまいます。地域社会というのはそんなに考えられない程希薄かというと、そうでもない。市も色々と仕組みを作ってやっていますし、地域の住民の中でも色々な事がもう取り組まれていますので、もう少しソフトな言い方にすると、この下の段の流れがうまく入ってくるのではないでしょうか。

○松原委員長　あと今日の議論との関連で言うと、そういう青少年の主体的な参加を確保していく事が嘆願だったという事も入れておきましょう。いつでもお客さんであったり、受身であったり、もう少し主人公として青少年をとらえる事が不足していた、という問題意識があると、例えば青少年会館の運営を当事者に委ねようというように繋がります。

○石井委員　あともう一つ、「はじめに」の中に「より複雑化、多様化、深刻化している青少年の問題」とありますが、それは一体どんな問題かと思ってしまいます。青少年をとりまく生活がそうであって、だから現状と課題、またはこれからの取り組み等についてイメージするものがとてもわかりやすいと思います。
○松原委員長　ここは、「より複雑化、多様化、深刻化している青少年を巡る社会的な状況」ということでしょうか。
○石井委員　そうです。背景がそういう事だということです。
○松原委員長　青少年が悪いわけじゃないですから。
○石井委員　家庭の問題、地域の問題とは一口では言い切れないくらいに色々な事が絡み合っているという事です。
○四方委員　それと、これからを担っていく青少年の本当の育成が凄く大事だという事で、その未来に向けてというような文言が「はじめに」に入っているといいと思います。
○松原委員長　明るい未来ですね。
○四方委員　非常に貴重な人達であるということで。
○事務局　ご指摘その通りだと思います。もう少しこう明るく前向きに、潜在的な地域の活性化というか能力もあります、というようなイメージでの「はじめに」にしていきたいと思います。
○冨田委員　救いのある言葉を入れておきたいですね。
○松原委員長　あとは事務局でまとめるにも時間がかかるので、その他にお気付きの点がありましたら、直接事務局に申し出ていただいて、やりとりをしながら原案を作成し、次回には全体の確認と補足的に議事録に残すような議論をするということで、細かい文言訂正はそういうような形にしていきたいと思います。
　では、次回のスケジュールについて事務局からお願いします。

日程調整＞会議日付検討中＞22 日 16 時に決定

○松原委員長　それでは、その間に報告書案について各委員とのやりとりができますか。
○事務局　今日のご意見を踏まえた最終案としてのまとめをしまして、各委員にご報告をしながら修正していきます。
○松原委員長　それでは今日は予定した議事を終わりましたので、事務局にお戻しいたします。
○事務局　長い時間ありがとうございました。以上で終了させていただきます。